子どもの学びの姿から授業を考える

11月11日（水）の5時間目に、5年生の国語科で研究授業を行いました。今回の授業では、説明文に使われている写真や図表などの資料に着目し、筆者が資料を使った意図や効果について考えました。子どもたちは、自分が効果的だと思う資料を選び、その理由をノートに書いたり、友だちと意見を交流したりしながら、考えを深めていきました。授業後には、教職員による事後研究会を行いました。今回取り入れたのは、「事実解釈型」と呼ばれる研究協議の方法です。この研究会で大切にしているのは、「子どもを主語にして授業を見つめる」ことです。子どもがどのような発言をしたのか、どのように行動したのか、友だちの意見を聞いてどのような反応をしたのかなど、子どもの具体的な姿をもとに話し合います。









そして、その姿を「事実」として捉えた上で、「なぜ、この子はこのように考えたのだろう」「どのような支援が学びにつながったのだろう」と、それぞれの教職員が多様な視点から「解釈」を出し合います。「事実は具体的に、解釈は多様に」一つの事実に対して、すぐに一つの結論を出すのではなく、さまざまな見方や考え方を出し合うことで、自分だけでは気付かなかった子どもの姿や学びの意味に気付くことができます。

今回の研究会でも、子どもたちの発言やノートの記述、友だちとの関わり方などを手がかりに、教職員が活発に意見を交わしました。沖代小学校では、これからも子どもたちの学びの姿を大切にしながら、教職員同士が学び合い、一人ひとりの子どもをより深く理解することを通して、よりよい授業づくりを目指していきます。